

書評

現象学でよみとく
専門看護師の
コンピテンシー

- 編集 井部俊子／村上靖彦
- 定価 本体 3500 円＋税
- 判型 B5 判
- 頁数 236 頁
- 発行 医学書院

評者

三井記念病院 副院長・看護部長
井上由美子

専門看護師を活用したいと
思っている看護管理者に

CNS との出会い

20 年程前のことになりますが、当時所属していた組織で初めての専門看護師（以下、CNS）が誕生した時には、特に深い感慨を覚えました。

私は病棟看護師長として、その CNS と仕事を共にしました。複雑で介入が困難な患者を前に、現場の看護師の持てる力を十分に発揮させるとともに、医師や多職種も上手に巻き込み、「心地よいチーム活動と患者ケア」を実現したことに、大きな感銘を受けたものです。患者や家族が抱える問題を、疾患とその背後にある精神的苦痛、不安や葛藤をさまざまな角度から捉えて判断する力と広い視野を持ち、自らの実践と適切な介入をしていたことは言うまでもありません。

同時に、CNS 自身が持ち合わせていた人としての魅力や人間力が、看護師も多職種も引き寄せたように記憶しています。その魅力や人間力とは以下のような要素でした。看護の心「マインドセット」が軸にあり、実践が伴っていること。現場に出向いていること。臨床の看護師がいかに複雑で煩雑な業務をしている中で日々の看護ケアを実践しているのかを理解し、指導のタイミングや承認と不足部分の明確な提示、この人に相談したい、聞いてほしい、調整に介入してほしいと思わせること。

CNS との質の高い仕事の経験を経て、その後、看護部長として転職した組織では、大学院に進学し CNS 取得を目指すスタッフを支援するために新たな教育予算を獲得しました。これは組織にとって意義深いことでした。

CNS を支援するための
ヒントになる 1 冊

一方、多くの看護部で以前から「CNS

の活用」が課題になっています。1 人ひとりの CNS には発達段階があり、内面的な成長プロセスを経て役割を獲得していくことを、看護部長が認識し、継続的に支援する必要があると思います。過去には、私自身にその認識が不足したために、全ての CNS と十分な関係性を築くことができなかった経験もありました。

本書は、看護管理者にとってなかなか見えない CNS の特性を、気鋭の現象学者がインタビューを通じて解き明かしていくもので、急性・重症患者看護、在宅看護、老人看護、慢性疾患看護、精神看護、がん看護の 6 領域 7 事例が取り上げられています。インタビューは事例の分析だけにとどまらず、時としてなぜ看護師になったかにまで及び、巧みな質問によって、各領域の CNS が臨床の現場でどのように患者と向き合っているのか、その質の高い倫理的なケアとその根底にある思考が手に取るように伝わってきます。

現場の看護師が考える益と組織運営者である看護管理者が考える益とは、時として異なります。その異なる部分をつなぎ、紡ぐ役割も CNS には期待されます。また、地域包括ケア時代となり、地域全体で切れ目なく質の高い看護サービスを提供するためにも、やはり CNS によるつなぎや紡ぎが重要です。

本書は、CNS を活用したいと願いつつ、どう活用してよいか迷いを抱く看護管理者にとって、大きなヒントになる 1 冊だと思います。